

『来たるべき蜂起』 翻訳委員会十ティクーン著

### 反一装置論

新しいフラッグの直観の到来

もはや今日の革命は顔や名前のある担い手をかならずしも必要としない。誰でもあってもいい、誰ともつかえのきくような個人たちが、ごく個別の目標や課題をめぐって交渉、コミュニケーションしあう協働から生まれる匿名的(アノニマ

委員会と解説対談は、震災、原発事故、脱原発運動以降の日本の社会にティクーンの「装置」論を援用し、「絆」や「よりよい社会」という言葉に捕獲されない主体の在処、オルタナティブの不在、今ここに潜在する蜂起について語っている。

「装置」とは何か? 管理された高速道路、携帯電話、監視システム、ネットなどがあげられる。装置

の「呪術的世界」。この著作については、すでに上村忠男による興味ぶかい読解が八〇年代の終わりに発表されている(『現代イタリアの思想を読む』、平凡社ライブラリー所収)が、ここからティクーンが目指すのは、「呪術の唯物論」である。

現実と技術手段の間で現前のゆらぎを否認する近代人に対して、未開人はこれを様々な儀礼的、呪術的手段によって修復、調整しようとする。シャーマンは挫折した現実を可能的なもの(すでにある言語)に作り変える「装置」を拒絶し、現実の出来事のために積み込まれた潜勢性(まだ表現されていない言語活動)を開かれた状態におこうとする。しかし、これは「よき社会」のために装置をブリーシュで弥縫することではない。自己作品化をどこへどこでもない。また装置から逸脱する怪物性を引き受けることもない。逸脱や怪物はむしろ装置が生み出す。しばしば善意のNG Oや一部のニューエイジ文化が権力/資本の枠内の修飾策にとどまるように。むしろ盗むこと(犯罪)、謀議すること(不透明化)、蜂起することの三段階、これらが「呪術の唯物論」の重要なステップとなる。

「週刊読書人」 2012. 9/21 (金)

## 今ここに潜在する蜂起

三段階の重要なステップとは

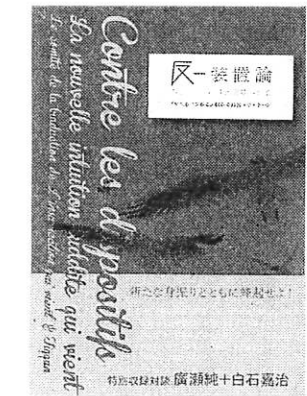
上野俊哉

「不可視委員会」も似たような集合知性の試みである。

本書はティクーンの「装置」についての論考と『来たるべき蜂起』翻訳委員会の論考、さらに西テクストへの解説となる廣瀬純と白石嘉治の対談という三部構成で成り立っている。翻訳

は何らかのイデオロギーを媒介するのではなく、装置そのものが特定の思考や情動となって生活をおおおう。これを批判的にとらえるティクーンの「装置の科学」は意外なところを参照する。たとえば、イタリアの民族学者、デ・マルティー

ノの「呪術的世界」。この著作については、すでに上村忠男による興味ぶかい読解が八〇年代の終わりに発表されている(『現代イタリアの思想を読む』、平凡社ライブラリー所収)が、ここからティクーンが目指すのは、「呪術の唯物論」である。



四六判・183頁・2100円  
以文社  
978-4-7531-0303-4

と訳されている語は、英訳では全て大文字の「THEY」となっている。ティクーンの別著『どうしたらいいか?』や本論考を含む『これはプログラムではない』の英訳注によれば、これはフランス語のonやドイツ語

★「来たるべき蜂起」委員会は、不可視委員会「来たるべき蜂起」翻訳を契機に、二〇一〇年に発足。★ティクーンはフランスの思想コレクティヴ。アガンベンなどの後援をえて、同名の雑誌を一九九九年に創刊。